



World Wildlife Fund

世界の自然を守る ⑥

— W W F の活動 —

藤原英司

スワジランド

ムリルウェイン野獣保護区

一九六八年九月七日、スワジランド政府の農相 A・K・フロップ (A. K. Hope) は聴衆に向かって力強い演説をした。

「諸君、わが国の諺を思い出していただきたい。『牛を朝早く放牧に出す者は隣り近所の者より多くのミルクを得る』という古来の諺は、今日、わたしが拝命した任務にそのままあてはまることであります。独立を迎えたわが国の夜明けともいふべき今、政府の高官諸兄が、まだ深い眠りについている間に、わたしは暁とともに起きだし、わがスワジランドに、より多くのミルクをもたらすため、喜んでこの責任を双肩になうつもりであります。わたしは野生動物が好きですが、われわれスワジ人は古来狩猟鳥獣に、常に絶大の関心を寄せ、昔は狩猟以上に大きな楽しみをわれわれにもたらすものは、あまりなかったのであります。しかし、すでに時は過ぎ去り、われわれは後世のために野獣を保護することの必要性を認識しました。このことは、わが国王ソブザ二世 (Sobhuza II) がムリルウェイン・トラスト (Mlilwane Trust) の後援者となり、また、われらの今ひとつの野獣保護区エーレン (Ehlangeni) の存在によっても立証しうるのであります。さらに、われわれの国会においても、議員諸君が、わが国における野生生物の衰退にいたく心を悩ましており、このことから野生生物の保護の重要さは、よくわかるのであ

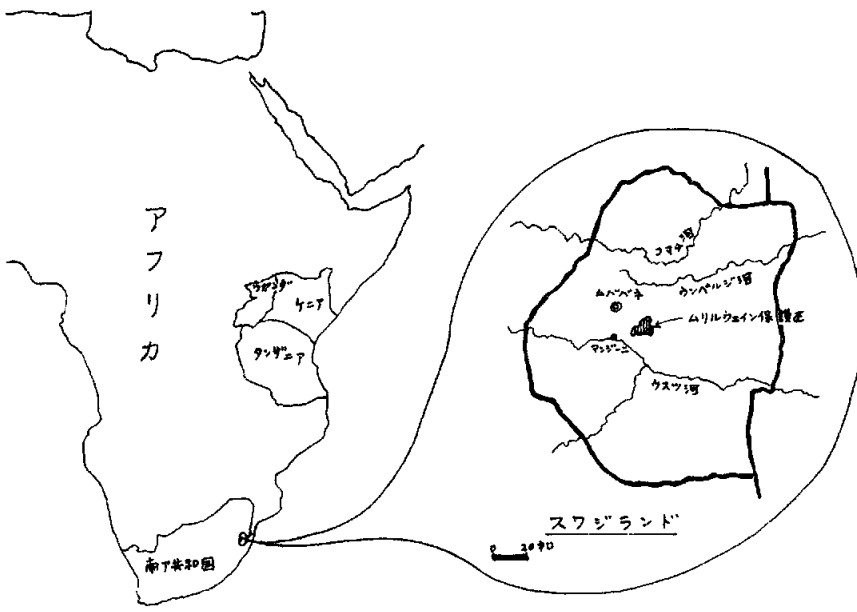
ります……」

これはムリルウェイン野獣保護区 (Mlilwane Game Sanctuary) に、二千八百エーカーの広さをもつニョニエン農場 (Nyonyane Farm) が加えられ、その管理が農相の手にゆだねられることになった時の演説要旨である。

WWFの年次報告は一九六一年から出ているが、その報告書にスワジランドのことが登場するのは一九六八年になってからである。それまでは、アフリカの動物保護といえば、たいてい東アフリカのケニヤ、タンザニア、ウガンダ、それに中央アフリカあたりが主として話題にのぼるだけだった。そしてその他のアフリカ諸国で、自然の状態がどうなっているかということはおおむね世間には知られず、また一般の人びとも、アフリカといえば、どこでもケニヤやタンザニアのように大規模な動物保護がおこなわれていると考えがちである。じつはわたしもその一人で、WWFの活動に参加する以前は、アフリカは野獣の天国といったようなのんびりした先入観をもっていた。第一、スワジランドなどという国があることさえさだかではなく、前述の農相の演説文を読んだ時も、そんな国があったかと思う始末であった。そしてそれがアフリカにあるとわかった時、わたしは改めてショックを受けた。『時は過ぎ去り……』という文章の中に、野獣天国の消滅した地域がアフリカにあることを、はっきりかきとったからである。

スワジランドは南アフリカの内地部にあり、まったく海を知らぬ国である。広さは四

国よりちょっと小さいぐらいで、そこに東京の中野区と同じぐらいの人口——つまり約三十七万五千人がすんでいる。このうち約一万人が白人、あとはアフリカ人で、独立の王国を形成している。だが独立国ではあっても、イギリスの保護領である。この国の原住民スワジ族は、十六世紀の終わりに北方から移動してきた南東バンツー族の末裔で、



農耕と牧畜による混成文化を築いた。十九世紀初めにソブザという大酋長が現われて、一族の結束をかため、戦力をたくわえて強大な勢力を維持し、近隣の部族を寄せつけなかった。その息子にムスワジという、これまで優秀な男がでて、いよいよ強力な小国家をつくりあげた。スワジ族という種族名はこのムスワジという男の名から出ており、また、前述の農相の演説に出てきた国王のソブザ二世というのは、昔の大酋長ツ

ブザの名を継承したものである。

スワジランドは、かつて非常に多種類の生物相に恵まれた土地だった。ところが二十世紀にはいつて野生動物が激減し、ライオンやゾウ、シマウマ、サイ、各種のアンテロップ類も、どんどん姿を消していった。この主たる原因は、国土の近代化である。

スワジランドには、大きな河が三つある。コマチ (Komati)、ウンベルジ (Umbezi)、ウスツ (Usutu) の三河であるが、これらの河沿いにある叢林地帯は、昔から各種の動物が集中的に集まっていた。ところがイギリス政府は、大規模な牧畜計画と灌漑計画をたてて、これらの地域を開発した。その時に動物たちを保護するてをうたなかつたためこれらの地域の野獣が根こそぎ滅んだ。彎曲したすばらしい角をもつセーブルアンテロップ (Sable Antelope) や、レッド・ダイカー (Red Duker)、リードバック (Reedbuck) などの美しいアンテロップ類も姿を消し、ゾウやライオン、サイ、シマウマ、キリンなど、およそアフリカを代表する各種の大型獣類が、つぎつぎと姿を消していったのである。

スワジランドで農場を経営していたテレンス・ライリー (Mr. Terence Reilly) は、あまりにひどい野獣の減少に心をいため、一九六二年に自分の農場千百エーカーを個人の野獣保護区にした。一九六二年という、日本では東京で初めてスモッグが騒がれた年で、スイスでは、WWFができてやっと一年たったところである。

ライリーはかなり短期間のうちに、滅びかかっている動物を自分の保護地へ集め、二十七種ちかい動物をふやすことに成功した。このころ、スワジランド国内には、いくつもの大きな変化があった。一九六三年までスワジランドはイギリスの連邦関係省の管轄にはいつていて、バストランドとベチアナランドを統轄する同じ弁務官に統治されていた。ところが一九六三年の十月に新しい弁務官が着任し、立法審議会と行政審議会が設けられた。そして、翌一九六四年六月に、初の総選挙がおこなわれた。そして南アフリカ共和国と協調的な酋長のひきいるインボドボ党が勝利をおさめた。南ア共和国と協調を保つことは、スワジランドにとって死活にかかわる重要問題である。なぜかという、地図でみてもわかるとおり、スワジランドは事実上、南ア共和国内にあるといってもいい状態であり、また主要な三つの大河の水源が、ことごとく南ア共和国内にあるからである。しかし、南ア共和国は、世界に名高い人種差別政策をとる国である。従っ



シロサイ © Argus Africa News
Service & WWF

て原住民が圧倒的に多いスワジランドとしては、イギリスに庇護を求めて南ア共和国に相対する必要もあり、政治的・地理的に終始、微妙な立場にたたさされている。政治というものは、常に国土を背景としておこなわれるため、ある国の自然環境の変遷やその環境を舞台に行なわれる保護活動の展開においては、その国の政治情勢を無視することができない。特にスワジランドのような特殊な国家の場合、その国の政治の概要を知ることとはそこに展開された自然保護活動を理解するうえで、不可欠のことである。

さて、一九六四年の六月に行なわれた初の総選挙で南ア共和国との親善をかかげる政党が大勝したわけであるが、しろうとの判断をもってしても、これで南アがスワジランドに手をかきやすくなったことは容易に想像できる。はたしてその時期に、ムリルウェイン野獣保護区に南アの「血」が流れこんだ。つまり、総選挙の翌月七月十二日に、この保護区は個人の禁苑から脱皮して初めて一般に公開されたが、それを実現させたのは、南アのクルーガー国立公園で、最初の狩猟監視官を勤めたステイブンスン・ハミルトン(Stephenson-Hamilton)の妻ヒルダ(Hilda)だったのである。そして今までの保護区の所有者ライリーは、この保護区の管理官として経営に当たることになった。

この保護区の一一般公開が、国内に及ぼした影響はきわめて大きかった。これがスワジ

ランドにと
つて初めの
野獣保護区
であったと
ころから、
まず一般民
衆が自然保
護の重要性
に目ざめは
じめた。そ
して一九六
四年から六
七年までの

間に四万人が、この保護区をおとすれた。そして一九六七年には国王のソブザ二世が王領の二十四平方マイルを動物保護区に指定した。これが、冒頭にかかげた農相の演説にでてくるエレン野獣保護区である。ここにはインバラ三千頭、キリン八百頭、エランド五十頭、シロサイ八頭、その他各種の野獣類千頭がいるといわれ、いつもパトロールがおこなわれて密猟を防いでいる。

国王の動物保護区ができ、ムリルウェイン野獣保護区が一般の注目を集めるいっぽう南アでは、そのころ、また別の新しい動きが出はじめていた。南アフリカ野生生物財団(South African Wildlife Foundation)がムリルウェイン野獣保護区の拡張に手をかそうという動きを見せだしたのと、WWFの南ア支部結成の動きがではじめたことである。この二つの動きは両方が平行して進行し、WWF本部での対スワジランド援助計画が急速に進展しはじめた。

そして一九六八年、WWF南ア支部のスタートと同時に、WWFは六五、五八〇米ドル(二七、三三五ポンド——約二、一九〇万円≡八〇二円換算)の支出を決定し、これが南アフリカ野生生物財団を通じて払い込まれた。この資金によってムリルウェイン野獣保護区に隣接する二千八百エーカーのニョニン農場が買いとられ、それがスワジランド農相フローブの手にゆだねられたわけである。

ムリルウェイン野獣保護区は、いっきよに三倍ちかい広さになったが、管理面において、すぐに手をうたなければならない問題が二つあった。ひとつは新しく保護区に加えた土地に囲いの柵をつけることで、これをやらないと、どこまでが保護区なのかということがよくわからなかった。また、もうひとつは、買いとった土地にいる人達に、地域外へ退去してもらうことである。この土地には六十世帯の家族と二千五百頭の家畜がいて、これらの人と家畜を、どうしても早急に区域外へ移さなくてはならなかった。

こうした必要をみたすため、WWFと南ア野生生物財団は一九六九年にふたたび、三七三米ドル(三、〇七三英ポンド——約二四六万円)を支出した。保護区では、さっそく柵のとりつけにかかった。だが、柵をまわしたのは隣接する農地との境を主にし、西側の荒地に面したほうは、幅三キロにわたって無柵のまま、しばらく放置することにした。これは外部に生き残っている野獣のうち、保護区へ逃げこみたいものがあれば、それを受け入れるためだった。むろん保護区の野獣が逃げだしていく可能性もあったが



セーブルアンテロープ © WWF

外部は野獣たちにとって、もはやけつしてすみ良いところではなかった。狩猟による迫害もさることながら、われわれからみると清浄な自然が残されていそうに思えるこのアフリカの土侯国でも、自然の汚染が急速に進みはじめていたのである。スワジランドは国土の三〇%が岩地で、農地は国土の約二〇%である。しかし農耕地のほとんどの部分が肥料や石灰を必要としており、化学肥料や殺虫剤が導入されている。それもオルガノクロリンやパラチオン、砒素、磷酸等、毒性の強いものが、まったく規制されることなく用いられている。しかも、これらの農地は大部分が丘陵地帯にあるため、土砂は常に河川へ流入し、同時にばらまかれた農薬や殺虫剤も河川に流れこむ。このため近年になって、この国でも魚や鳥の死滅が目だつようになってきた。また卵をうまない鳥や、卵をうんでも、その殻がやわらかいものがふえはじめている。これらは明らかにDDTや他の強力な農薬のためとみられる。

またスワジランドには、前述のとおり三本の大河と、いくつかの河川があつて水は豊富なように思われるが、近代工業の発展にもなつて、農業用以外に使用する水の需要が増大している。そのため農業灌漑用水は、国土の七%をうるおすといどの量しかないといわれている。従つて、灌漑用の大型ダムを建設する計画が進行中である。それだけでなく、スワジランドでは他のアフリカの諸国と同様、すでに鉱物採掘にともなう河川の汚染が進行しつつある。東部地方では錫の露天掘りの結果、河

川が汚濁し、さらに家畜の過放牧によつて土壌が侵蝕され、大量の土砂が河に流れこんで漁民の生活を圧迫するという事態がおこつた。そもそもスワジランドの放牧は、アフリカ諸国中では最高の密度といわれ、平方キロ当たり三二・六頭という数字がでていゝ。従つて、過放牧にともなう草原の荒廃と土壌の侵蝕は、いたるところに影響をおよぼしつつあり、これは必然的に野獣たちの生息領域をせばめつつある。家畜が野獣の土地へはいりこむということは、家畜と野獣とが一時的に同じ土地を共有し、そのあとで、しだいに野獣がその地域から追いつだされていくという過程をとる。この場合、家畜の数が少なければ、一見、野獣と家畜は共存しうろように見える。しかしこれは必ずしも正しくない。なぜかという、家畜の病気は、家畜の数には関係なくその土地に持ちこまれるからで、これはいつのまにか野獣達に感染し、目に見えない形で野獣たちを侵害していく。スワジランドのように家畜の数が多い場合、家畜がもたらす多くの病気は自然の動物相を圧迫する大きな潜在要因とみなくてはならない。げんにスワジランドの放牧地では、広い地域にわたつて土壌にサナダ虫の卵の付着がみられ、マトサワ牛肉工場で屠殺される牛の一四%が糸虫におかされているという。

いづぼう、スワジランドの低地や草原地方には大量の石灰が埋蔵されているが、これを利用して火力発電所をつくる計画がある。この場合、ばい煙、粉じん、灰、燃えかす及び温水が自然を汚染するおそれがある。特に温水が自然に及ぼす影響は、この国では他国にみられない大きな問題をはらんでいる。なぜかという、この国の河川にはビルハルツ住血吸虫が広く生息しているからである。この住血吸虫は、水温が六五度F以下のところや流れの早い河川にはすまない。ところが発電による水温の上昇や、ダムの建設によるよどみ水の増大、さらに灌漑による流れのゆるい水路の増加は、この寄生虫の繁殖を促進し、各地にこの寄生虫をまん延させていく。そのほかに砂糖工場、パルプ工場、アスベスト工場など、さまざまな工業がこの国の環境に圧力を加えつつあり、政府は天然資源委員会を発足させるとともに、水資源法や天然資源法、森林保存法、淡水魚保護法、野鳥保護法、植物保護法などを施行して環境悪化の防止につとめつつある。豊かな自然に恵まれているはずのアフリカの小さな国でこのような法律が施行されていることを知る時、われわれは今日の環境破壊が、けつして文明国だけのものではないことを思い知らされるのである。



シマウマの輸送 © S. A. Wildlife Foundation & WWF

さて、ムリルウェイシ野獣保護区では、新しく購入したニュオンエイン地区の住民と家畜を移す作業を精力的にすすめ、一九七〇年までに、すべての住民と家畜を区域外へ移した。同時に今までの住民の住居をすべてこわしてとり払い、あとに土着の植物や木の種をまいた。そして保護区の管理維持を強化するために、約二十キロにおよぶ道路が整備され、常時パトロールがおこなわれるようになった。その結果、この地域には、ダイカーやリードバックのようなアンテロープ類のほか、イワダヌキ (Rock Hyrax) のような小型獣類、さらにシロハラノスリ (Jackal buzzard)、カンムリクイタカ (Crowned eagle)、チャパネテリムク (Redwinged Starling) などの鳥類も定着するようになった。

これらの動物たちは、いずれも十数年にわたってこの地域から姿を消していたものである。それがつきつきと定着し、植物相も回復しはじめたことは、保護区の関係者にと

って大きな喜びであった。

だが、関係者にとって、もうひとつ、大きな夢があった。それはこの土地に、もう一度セーブルアンテロープを導入することだった。

セーブルアンテロープは

アフリカ中部から南部にかけて生息するカモシカ (レイヨウ) で、半月形にそりかえったみごとな角をもっている。体は黒光りしており、その色がクロテン (セーブル) に似ているところから、セーブルアンテロープと呼ばれるようになった。わたしは中央アフリカ

でこのアンテロープの群を見たが、体色は褐色の強いものがかなりいた。しかし、なんといっても美しいのはその孤を描くみごとな角で、セーブルアンテロープの群が疾走する姿は、手に手に半月刀をふりかざして突撃する古代騎馬民族の情景を思わせるものがあった。いわばそれは草原に展開する勇壮な野性の景観であり、アフリカの自然に、躍動する生命の息吹きを吹きこむもののように思われた。

スワジランドで、このみごとな獣が姿を消したのは、十九世紀末とみられている。以来七、八十年間、スワジランドには、このアンテロープがもたらす自然の息吹きはなかったつまり、スワジランドは世界の人のびとの話題にもめったにのぼらぬような、いわばもともアフリカらしい自然が残っていると思われる土地でありながら、すでに半世紀以上も前に、アフリカの姿を失った地域だったのである。従ってムリルウェイシ保護区の管理体制がととのうとともに、この保護区にセーブルアンテロープを復活させたいという強い希望が関係者の間に起こったのも、けっしてふしぎなことではない。保護区では南ア野生生物財団とWWFに資金援助を求めるとともに、さっそく南ア共和国のトランスバル地方から、セーブルアンテロープを移入することにした。この捕獲作戦はトランスバルの北東部に当たるフアラボルワ (Phaborwa) に近い所で網を使っておこなわれた。その結果、十四頭のセーブルアンテロープが捕えられ、ムリルウェイシ保護区へ送られることになった。十四頭の内訳は、雄一頭、雌十頭、子供三頭だった。だがこのうち雌一頭は、捕獲後、まもなく死亡した。

残った十三頭は、さっそく保護区へ送られたが、この輸送に要した六百五十キロの道は、アンテロープたちにとって、かなりきついものだったにちがいない。なぜかという保護区について放したあと、まもなく雌二頭が死んだからである。そして解剖の結果、二頭とも歯ぐきが侵されるほど老齢であることがわかったが、捕獲と輸送のショックが、これらの老獣の死期を早めたことは、否定できないことのように思われた。悲劇はさらに続いた。雄が保護区から逃げだし、約二十キロ離れたところにあるマジンジーニ (Mazinji) の町の近くで見つかり、さっそく捕えて保護区へ連れ戻しはしたものの、翌日、その雄が死んでしまったのである。また、二頭の子供も、川に落ちて溺死した。しかたなく、保護区では、ふたたびトランスバルから雄を一頭運んできた。

保護区では最初に十三頭を運んできた時、全部を一度に放さずに、五頭を囲いに入れ

ておいた。この五頭をあわせて、今、保護区には合計九頭が残ったわけである。保護区では移入したセーブルアンテロープ全部を野性状態に放置することに危険を感じた。そこで、新たに六十エーカーの広さをもつ囲いをつくって、そこに今まで放さずにおいた雌五頭のうち四頭と、新しくつれてきた雄一頭を入れた。この雄はまだ若すぎて、最初の年にはまだ四頭の雌を相手にすることはできなかった。だが翌年には十分つがうことができるようになり、現在この五頭の群が中核となって、増殖がはかられている。この時、WWFから支出された資金は四、七三八ドル（一、八九五英ポンド）約一五二万円）だった。

ところで、保護区の動物相がしだいにふえる中で、保護区をさらに拡大しようという動きがおこった。スワジランド議会は一九七一年に、国家信託財産委員会(National Trust Commission)を創設する議案を裁決した。この委員会は、国立公園などの管理と創設、博物館や古文書館など各種の国立センターの運営にあたることになった。そして委員会では、さっそくムルルウェイン保護区を拡大することについて検討をはじめ、スマット一家(the Smatts family)が所有する五千四百エーカーの土地を買取することになった。この時も南ア野生生物財団とWWFが資金援助に応じ、総額三九、五八八米ドル（一六、〇六六英ポンド）約一、二八八万円）の資金が提供された。

これによって保護区は一躍二倍以上の広さになり、七年前の保護区を一般に公開した当時にくらべると、十倍ちかい広さになった。このスマット一家から買いうけた土地にはスプリングバック(Springbuck)やクリップスプリンガー(Klipspringer)、プレスバツク(Blesbuck)など、小型のアンテロープ類が住みついていた。とくにこの土地はスワジランドのうちでは、クリップスプリンガーの数少ない最後の生息地で、この地域が保護区に加えられた意義は大きかった。クリップスプリンガーは体重が一五キロぐらゐの小型のアンテロープで岩場を好み、体は黄色がかかったオリブ色を呈し、岩場ではみごとに保護色の効果を發揮する。そして岩場での軽快な跳躍は、よくヨーロッパアルプスに生息するシャモア(Chamois)にたとえられ、アフリカ産のアンテロープ類の中では異色の存在である。

クリップスプリンガーがいるということは岩場が多いということであり、自然環境としては、どちらかというところと荒地に属する。しかしこの土地には多くの小さな川の源流が

あり、そこを保護区に加えたことは、幾つもの川の水質を清浄に保てるということであった。これは他の河川がしだいに汚染されつつある現在、非常に大きな意義をもつことといえる。だが、ムルルウェイン保護区の大半分が、岩場とそこに散在する叢林地帯であるということは、保護区として必ずしも満足すべきことではない。従って関係者は引き続き、保護区の拡張を検討しつつある。

保護区の拡大とともに、この地域へさらに何種類もの動物が搬入された。その中にはシマウマもいたし、また、かつては南アフリカに広くすんでいたといわれるシロサイも移入された。シロサイは性質の温順なものが多く、繁殖期以外には、ごく近くまで接近して観察することができる。人と動物は元来いがある存在ではなく、たがいに一定の距離を保てば共存しうるものが多い。このことはシロサイのような大型獣でも、けっして例外ではない。そしてムルルウェイン野獣保護区でも、シロサイが輸入されることによって、ここに紹介した写真に見られるような人と獣のはほえましい関係が復活したのである。

― 連載をおえて ―

今回で一応、このシリーズの連載をおえさせていただくことになりました。早いもので、第一回目を書いてから四年がたちました。書きだした当時はWWF日本委員会も発足したばかりで、WWFという組織のことも、また何をやっているかということも、一般の人びとには、まったく知られていませんでした。本誌にWWFの組織や活動の一端を紹介させていただいたおかげで、皆様に多少ともWWFのことを知っていただけたことをうれしく思っています。しかし連載しながら、北海道を舞台とした本誌に、なにか場ちがいなことを書きつづけているようで、いつも気がとがめていました。また、資料として使えるようにということから原名や支出予算等をくわしく記入したため、皆様に退屈な思いを強いたのではないかと気にしています。多くの不備な点、いたらなかった点については、どうかお許し願いたく思います。

WWFの活動はいつも続いており、このシリーズの延長線上で、今日も多くの人がびとが献身的な努力を続けています。WWFの活動に興味をもたれる方が、一人でも多く世界の自然を守るために立ちあがって下さることを願ってやみません。

(資料及び写真提供WWF本部)

(WWF日本委員会委員)